

Introduction

ゴードン・W・プランゲによるこのスピーチは、メリーランド大学教育技術センターが 10 年以上前に制作した 2 本の U-Matic ビデオを 1 本に編集したものから書き起こされたものです。このビデオには 1979 年 5 月 5 日に行われたゴードン・W・プランゲ文庫命名式典の様子が収録されています。収録時間は約 1 時間 13 分で、トール氏が 4 分間、緒方氏が 15 分間、ハラー氏が 5 分間、エルキンス氏が 5 分間、プランゲ氏が 35 分間スピーチをしています。このビデオを教育目的に使用したい場合は、シカゴ大学図書館の奥泉栄三郎氏より入手することができます。

DR. GORDON W. PRANGE SPEECH AT DEDICATION CEREMONY

エルキンス学長、素晴らしいご紹介をありがとうございました。こんなふうで紹介されたら、どんな話が聞けるのか自分でも楽しみです。緒方博士の刺激的なスピーチにも感謝します。私もせめてその半分ほどいいスピーチができるといいですが。

トール学長、グラックスターン総長、ハラー博士、エヴァンス博士、そして会場のみなさん。まずはじめに、このマッケルディン図書館の日本語出版物コレクションを私にちなんで命名してくださる過程に携わったすべての方々に、深い感謝を申し上げたいと思います。このたいへんな光栄を謹んで受けとめるしだいです。喜ばしく、また身に余ることです。今日これからお聞かせするのは、にわかに信じがたいようなお話です。そう、ほとんどありえないようなことです。たくさんの要素が長年にわたり絡み合って生まれたものです。運命、運命がその根底にあります。偶然の引き合わせ。そのとき、その場に、その状況で、たまたま居合わせたこと。自分では付け足すことも差し引くこともできない、周囲の人たちの決断の数々。そして少しの展望と、たくさんの尽力、メリーランド大学をよくしたいという強い願い。

これからするお話には、トマス・ウルフが「偶然がもたらす暗き奇跡」と呼んだものが数多く含まれています。ただし、この奇跡は暗いものではありません。それどころか、とても明るく、そこには闇雲に手探りする偶然というより、善良な意志が働いていることが容易に見てとれるでしょう。私の親愛なる友人、旧日本海軍大佐の故・淵田美津雄氏ならば、神の手がその子どもたちの一人を自らのもとへ導き、小突き、時には平手で打ってでもうながした過程を物語る話だ、とでも言うかもしれません。私はいまだにこの物語に魅了されつづけていますが、みなさんもその半分でも魅了されてくれたらと思います。すべてのことをお話する時間はありませんが、少なくともだいたいの概要はお伝えできるでしょう。

話は、日本軍が真珠湾攻撃を行った運命の日、1941 年 12 月 7 日から始まります。私はすべてのアメリカ人と同様、衝撃を受け、困惑し、深い悲しみと怒りを感じていました。そして数百万の同胞と同じく、私は日本とその国民についてとてつもなく——また恥ずべきことに、とも言わねばなりません——無知でありました。当時私はヒトラーの国家社会主義

というテーマに没頭していました。1935～36年にベルリン大学で研究し、ヒトラーの演説も何度か聞いており、扇動政治家、プロパガンディストとしてのヒトラーについて本を執筆しているところでした。「赤城、加賀、飛龍、蒼龍、翔鶴、瑞鶴」と言われても、日本語だな、ということがわかる程度。それが当時世界最大だった日本の機動部隊の中核を担う6艦の空母の名前だとは、知りもしませんでした。また、アメリカ海軍についてもほぼ同じくらい無知でした。真珠湾と聞いても、カキの養殖のことぐらいしか思い浮かばなかったでしょう。真珠湾攻撃当時、メリーランド大学の歴史学助教授になったばかりの私に、あなたはいずれ日本へ行き、この大胆な作戦に関わった生存者ほぼ全員とじっくり話をすることになる、などと言う人がいたら、「困った人ですね、あなた」と返したでしょう。さらにその人が、私がいずれこのテーマについてアメリカと日本の両方の観点から4巻もの本を書く、などと続けたら、「あなたはどうかしてる」と言うでしょう。そしてその誰かさんが水晶玉をもう一度のぞきこみ、いつか私が真珠湾攻撃を率いた淵田美津雄と親しい友人となり、彼の伝記の執筆に協力する、と言おうものなら、その人を収容してもらえよう白衣の人たちのもとへ連れて行くことでしょう。真珠湾攻撃の日、自身の隊を運命の飛行へと導いた淵田は、アメリカを憎悪していました。最大限の破壊が必要だと信じており、できるかぎり多くの米軍艦艇を沈没させ、すべての米軍航空機を日本の決定的勝利への道を照らす灯となるよう焼き尽くすことだけを願っていました。戦後彼がキリスト教に改宗し、熱心な伝道師となり、アメリカで待ちうける聴衆に向けて説教を何度も行い、長年にわたってこの国に暮らし、ここを故郷と呼ぶようになる、と聞いたら、当時の彼は笑い飛ばすでしょう。彼の愛息、善彌氏がアメリカで教育を受け、オレゴン大学で建築学の学位を取り、アメリカ人の白人女性と結婚し、アメリカの市民権を得て、ニューヨークに建築事務所を構えるという夢のような話を、信じもしないでしょう。美しい娘さんの美彌子さん——そう、実に美しい方なんですよ——、彼女もまたアメリカに渡り、カリフォルニアでインテリアデザインを学び、よりによってアメリカ海兵隊の軍曹と結婚し、アメリカの市民権を取得しようとしているとは、想像もつかないでしょう。

太平洋で戦況が進むなか、私は多くの同胞と同じく、伝説的なダグラス・マッカーサー將軍の功績の数々を見守っていました。いずれ東京で、この陸軍元帥の壮麗な執務室において彼と対面し、歴史課長として1時間にわたり私が用意した4巻におよぶ報告書について彼に説明をすることになるとは、考えもしませんでした。それからマッカーサー將軍とチャールズ・ウィロビーGHQ参謀第2部長とともに、その厳粛な執務室でさらに50分にわたって、朝鮮の戦況や極東の状況、世界の共産主義一般について議論するなどとは。また、イケダ・トシオという日本人学生をアメリカの我が家に迎え、その後5年間をともに暮らし、彼が私の3人の子どもたちにとって大切な兄のような存在となり、1956年にメリーランド大学を卒業することになるとは、予測もしませんでした。1949年の夏のある日、日本の占領に関する世界最大の資料コレクションをメリーランド大学宛てに発送することになるとは、思ってもみませんでした。その最初の積荷を発送してから30年後、メリーラン

ド大学がこれらの資料を私にちなんでゴードン・W・プランゲ文庫と名づけてくださるとい
う素晴らしい名誉を授かるとは、予想だにしませんでした。

以前エルキンス学長にお話しした通り、また昨年5月30日にグラックスターン総長に手
紙でお伝えした通り、「1949年に東京の極東軍総司令部でこれらの資料の発送手配をしてい
たとき、こんなことになろうとは思っていませんでした。1951年の秋に大学へ戻ったと
きにも、こんなことは考えていませんでした。私はただ、今どんなことでもいいから切実
に助けを必要としているメリーランド大学図書館のために、これほどの貴重な資料を獲得
してやりたい、と思っていただけでした。それができるだけ、私はじゅうぶん満足して
いたのです。」ですから、今日が私にとって生涯誇りをもって思い出すこととなる特別な日
となることを、おわかりいただけるでしょう。実際今日は、ここメリーランド大学での私
のキャリアにおける絶頂なのです。

一体どうやってこういうことになったのでしょうか？ それはまさに『リプレーの世界奇
談集』のような話です。私の人生の最初の3分の1ほどは、私が日本と何かしら関係する
などということは到底ありそうもないことでした。私が日本人と出会う確率は、宇宙から
来た緑色の異星人と遭遇する確率程度のものだったのです。大学時代も、日本語や日本史、
日本に関わるどんな授業も、取ってみようと思ったことすらありませんでした。第二次世
界大戦前夜、当時の基準で言えば、私はそれなりにいい教育を受けていました。それなり
に、というのは、学术界に足がかりを得ていながら、世界の主要国家の1つである日本、
世界でも有数のその偉大な国民についてまったく無知だ、という程度にです。こういった
知識レベルなのは私1人ではありませんでした。実に多くのアメリカ人が、日本について
あまりにも無知であるがゆえ、すべて知っているような気になっていたのです。1940年か
ら1941年にかけて、アメリカの新聞・雑誌は日本は劣っているという神話をまるで空気ド
リルのように機械的に力説し続けていました。現実を理解している客観的な評者もわずか
にいましたが、大半のアメリカ人は日本がほぼ破産状態で、資源に乏しく、外貨も持たず、
中国での戦況に行き詰まりどうにもならなくなっている、という確信を互いに深め合っ
ていました。

[映像中断] ネルソン時代に逆戻りしたようなものです。彼に面と向かって言うのは勇気の
いることでした。ですが、当時の私はじゅうぶん図々しかったのです。そうなのです。し
かも、海軍にその判断は間違いであると指摘するのが私の責務だと思うほど、若かったの
です。大佐は私が自説を主張し、ヨーロッパ戦域への派遣を懇願するのを黙って聞いてい
ました。私がガス欠になってくると、このエイハブ船長のような大佐は「大尉、話はもう
終わりか？」と聞きました。そして若干皮肉っぽく、これで終わりならば、ちょっと言
いたいことがあると言うのです。彼は率直にこう述べました。いわゆるヨーロッパ通とい
うのは有り余るほどいる。だが日本に詳しい者はほとんどいないので、海軍としては可能性
のありそうな者を無理やりにでも引っばってきて、本人の意志はともかく、日本通に仕立
て上げてしまうしかないのだ。この重要な任務に選ばれたことを誇りに思ったほうがいい

ぞ、と。大佐は続けて、「大尉、なんとかうまくいくさ。君がなんとかうまくいかせるんだ」というようなことを言いました。この話し合いを終えたころには、私は自分のエゴを打ちのめされ、すっかり不機嫌で不愉快になっていました。まさに銛で打たれた白鯨のような気持ちです。私が海軍に入って最初に付いた副艦長は、フォート・スカイラー訓練校のほやほやの新人兵の私たちに、海軍には3つのタイプの間がある、と説きました。1つは小粒の軟弱者、もう1つはでかい何とやら、そして海佐だ、と。実際には「何とやら」と言ったわけではありませんが、ここでははっきり言わないでおきましょう。あの老いぼれ大佐はどのカテゴリーに入るのだろう、と思ったものでした。ですが、後になって考えると、彼は私に素晴らしい機会を与えてくれたのです。彼の確固たる決断のおかげで、私はまったく新しい世界を、生涯の指針を、こんなことでもなければ出会うことのなかった素晴らしい日本の友人たちを、得ることができたのです。人はときにダイナマイトが爆発しないと、自らが掘った心地のいい轍を抜け出せなくなってしまいます。この大佐は導火線に火をつけてくれたわけで、私は彼に生涯感謝し続けるでしょう。

コロンビアからプリンストン大学へ移ると、私は学生から教師へと転身し、アメリカ海軍軍政学校の一員として教鞭をとりました。そこでは日本の施政方針、行政手続き、行政組織について教えました。その後、海軍にプリンストンからカリフォルニア州モントレーの民事部中間準備地域に送られ、そこで最終訓練を受けて正式な任命を待っていました。訓練を修了すると、どうも退屈してしまったので、私は以前ベルリンで、また1937年に太平洋問題調査会からの奨学金でポスドクとして10週間在籍していたカリフォルニア大学で学んでいたロシア語を鍛え直すことにしました。海軍から90日間カリフォルニア大学で学ぶ許可を得た私は、歴史学部のロシア人教師たちと交渉し、日本での任務を終えたらメリーランド大学との共同プログラムを立ち上げ、それによりカリフォルニア大学で1年間と夏季休暇2回にわたってロシア史とロシア語を集中的に学び、その後、独露関係に関する学術研究を行うことができるよう取り付けました。つまり日本に行った時点では、そこで任務を果たし、点数を稼いで、さっさと帰ってこようという腹積もりだったのです。日本を嫌っていたわけではありません、むしろその逆です。痛ましい戦禍もこの国の美しさを隠すことはできませんでしたし、来日してすぐにも日本人に好意を持つきっかけとなるような経験がいくつかありました。初めて東京を訪れたとき、爆撃でひどくやられた地域で万年筆を落としてしまいました。自分では落としたことに気づいていなかったのですが、日本人の男性が50ヤードも後ろのほうから叫びながら手を振って私を呼び、万年筆を手渡してくれたのです。高級な万年筆でしたし、彼がそれをくすねたとしても不思議はありませんでした。そうしない理由などなかったのです、そう、彼の誠実さ以外には、何の理由もないのです。この出来事で私にとって日本人の株はぐっとあがりました。またあるとき、東京から横須賀の海軍基地へ行くのに間違った電車に乗ってしまったことがありました。11月半ばごろのことです。車内は日本人でいっぱい、アメリカ人は私1人でした。私は彼らに殺されてもおかしくなかったし、線路脇に死体を埋めてしまえば、私の消息は謎のま

まとなったことでしょう。もしくは、皆で私を襲って財布を盗むことだってできたでしょう。ところが、彼らはお互いに尋ね合って、最後には横須賀付近に住んでいる男性が私が必要としているかを理解してくれたのです。その男性は、横須賀行きのバスが出ている海兵隊駐屯地の最寄駅まで連れて行ってあげる、と申し出てくれました。しかも、私が確実に到着するよう、結局駐屯地まで付いてきてくれたのです。しかしながら、どれほど日本とこの国の人々を気に入ろうとも、この時点では私にとって日本は単に、あらかじめ用意されていた人生のパターンにおける間奏のようなものでしかありませんでした。ただし、予想外に快い間奏ではありましたが。

アメリカへの帰国が近づいていた 1946 年 8 月のある夜、私はパーシー・バウト中佐とスタン・リース二等海佐という 2 人の友人と第一ホテルで一杯やっていました。リース海佐はジョージア州ダブリンの出身で、見事な南部訛りでした。「ガウドン」と彼は私を呼んだものです。私は彼をポークチョップとかジョージアボーイとか呼んでいました。その晩リース海佐の部屋に座ってあれこれおしゃべりしていると、ロナルド・リングという陸軍大佐がやってきて話に加わりました。彼は自分のいた GHQ 参謀第 2 部が、歴史課でマッカーサーの太平洋での作戦やそれに関連したテーマについての資料をまとめる仕事をしてくれる人を探している、と話しました。この任務に必要とされる軍事的なバックグラウンドと歴史的史料編纂の経験がある人材がなかなか見つからない、とのことでした。するとリース海佐は私を指差して、「ここに人手がいるよ」と言いました。そこでリング大佐は私に興味があるか、あるとすれば給料はいくら欲しいか、と聞きました。私はさして興味を持ってませんでした。もう荷造りをしていましたし、あと 1 週間もすれば横須賀から出港する船で帰国し、ここメリーランド大学で学者としてのキャリアを再開する予定だったのです。ですから私はふざけて、「1 万」と答えました。1946 年当時、これはとてつもない金額です。メリーランド大学に戻ってからももらえる給料の 2 倍以上です——別に嫌味ではないのですよ。私はこれなら彼もあきらめるだろうと考えました。リング大佐は「追って連絡する」と言いましたが、これは軍隊版の「こちらからご連絡しますので問い合わせはしないでください」という常套句だろうと察しました。しかし、それは間違いでした。手短かに言うと、リング大佐はその翌朝、私に GS-14 階級から始まりいずれ GS-15 に昇格する地位の職をオファーしてきました。なんと、私が要求した額以上の給料をもらえるばかりか、住宅も無料で支給され、PX を使うこともでき、家族を呼び寄せてもよく、医者も歯医者もタダだということです。全部あわせると、これは年間 1 万 5000 ドルほどに値します。友人たちに気は確かかと言われながらも、私はこの申し出を 1 度ならず、3 度も断りました。代わりに他の人を 2 人も推薦までしたのです。

横須賀から、大きな海軍基地のある九州西部の佐世保へ行く船で出発する日がついにやってきました。船は佐世保でおよそ 1000 人の海兵を乗せ、サンディエゴへ向かうことになっています。錨をあげ出港する船上で、私は「これで終わりだ。さよなら、日本」と思っていました。佐世保では海兵たちが乗りこんできました。ところがそこで、あの天候という

名の独裁者が登場したのです。日本ではおなじみの台風というやつが、上空に迫っていました。竹をなぎたおし、樫を根こそぎにし、国じゅうを水びたしにし、海辺の漁村を丸ごと吹き飛ばしてしまう、台風です。まともな船長なら台風のなか出港などしませんから、船は佐世保で台風が過ぎ去るのを待つことになりました。これには3日間かかりました。2日目の夜、ある男性が乗船してきました。旧知のガイ・スロープ中佐でした。彼はペンシルベニア州選出の元下院議員で、プエルトリコの知事を務めていたこともあり、ルーズベルト大統領の親しい友人でした。スロープ中佐は私に、なぜ占領軍で職を得ようとしなかったのかと聞きました。そこで私は、すでに一度仕事の話断ったことを説明しました。ことの経緯を話すと、中佐は驚いて、それがどれほどもったいないことを私に切々と説きました。金銭的な報酬だけでなく、一生に一度しか得られないような素晴らしい経験と、歴史が作られる過程を内側から見ることのできる機会を見過ごすことになる、というのです。中佐が実に差し迫った様子で真に関心を持って語るのも、その言葉は他の友人や同僚たちの説得には動かされなかった私の心に突き刺さりました。その晩、船室のベッドに横たわりながら、私は考えては寝がえりを打ち、寝がえりを打っては考えました。翌朝かすんだ目で起き上がったときには、参謀第2部に手紙を書いて、もう一度考え直したので、例のポジションがもしまだ空いていれば就かせてもらいたいと伝える決意をしていました。そしていったんアメリカへ戻り、ロシア研究を延期する手はずを整え、サンディエゴからメリーランド大学のハリー・シーバーク学長に電話をしました。学長はメリーランドに戻ってくることを条件に休暇をくれました。その間に、マッカーサー総司令部から東京での任務を私に与えるとの連絡を受けました。

私がこの予想もつかない運命のいたずらについて何度も自問したことをご想像いただけるでしょう。リング大佐はなぜ他でもない8月のあの日の夜に第一ホテルに立ち寄ったのか？ 彼はどうして参謀第2部が歴史学者を探しているという話をしようと思ったのか？ なぜあのとき台風が九州を襲い船を足止めしたのか？ なぜスロープ中佐は佐世保であの船に乗ってきたのか、別の船でもなく、あれより前でもなく後でもない、あの船に？ 神がリング大佐やスロープ中佐の足を私のほうに仕向けたとか、ましてや台風まで動員して私に便宜を図ったなどと思うのは行き過ぎと思えるかもしれません。しかし私は、神がメリーランド大学図書館のことを考えてそうしたのだろう、と思いたい。人間の運命の本質を否定してもしかたありません。ロシアには「自らの好意に背くことはできない」といった意味のことわざがあります。そういったわけで私は、今度は陸軍で文民として働くために、飛行機で東京へと戻ったのでした。

私はチャールズ・A・ウィロビー少将のもとで働くことになりました。マッカーサーの諜報局長だった彼は、おもしろく複雑な人物で、これといった特徴のない参謀たちの中で目立った存在でした。身長6フィート3インチ、体重220ポンドの大柄な体格でした。うぬぼれていて我が強く、マッカーサーを神に失礼なほどの熱心さで崇拜していました。また高い教育を受けた紳士でもあり、いくつかの言語を流暢に話しましたが、興奮するとソーセ

一ジ並みにばりばりのドイツ語訛りが出て、首が繁殖期のウシガエルのように膨れあがります。恐ろしい人でしたが、彼のもとでは私は機械のように働き、私たちはまわりに知れ渡るほどうまくいっていました。参謀第 2 部の歴史課には日本人の元陸軍・海軍の軍人たちが多数働いており、彼らはみな極めて優秀でした。戦争を日本の側から個人的な体験によって知り尽くしていました。彼らがいかに優れた働き手だったことか！ しかも、実に信頼のおける人たちでした。彼らが休暇を取るのは 5 月 27 日の 1 日だけ、日本が 1905 年に朝鮮半島の南の対馬沖でロシアを破った記念日です。我々アメリカ人は日本人の過去の栄光の記憶をうらやんだりしませんでしたし、ロシア人にそれほど固執していませんでした。こうした素晴らしい日本人の同僚たちがいなければ、私は日本から見た太平洋戦争について洞察を得ることはできなかったでしょう。その洞察があつてこそ、参謀第 2 部歴史課は正確な歴史を編纂し、すでに定着しはじめていたいくつかの誤った説を覆すことができたのです。また、彼らなしには真珠湾攻撃の舞台裏をすることもできなかったでしょう。中でも私のガイドとなり、スポンサーとなり、通訳となってくれたのが、元帝国海軍軍人の千早正隆氏でした。千早氏は帝国海軍内で知っておくべき人物をすべて知っていました。彼は現在まで、私の日本での代理人となってくれています。実のところ、私たちは兄弟のような仲なのです。私は日本での生活が落ち着くとすぐ、家族を呼び寄せました。私の家族もまた、すぐに日本を気に入りました。我が家の献身的なお手伝いさんたちは子どもたちを思いきり甘やかし、とくに息子のウィニーは何をやっても許してやっていました。私ではそうはいかないですがね。

今日の招待状とともに皆様にお送りした見事なパンフレットを読んでもいただくと、私が幸運にもメリーランド大学のために獲得することのできた資料がどんなもので、どれほどの規模のものなのかがおわかりいただけます。あるとき学内の誰かが、ここでは名前は伏せますが、占領軍は資料を収集して破棄しようとしているのではないかと言い出しました。もし私が引き取ると申し出なければ、これらの資料は消えてなくなってしまうというのです。ここで私が窮地に陥った資料を救うべく、光り輝く鎧を身につけ白馬に乗って現れた騎士のように語れば素敵なのですが、実際はそうではありませんでした。アメリカ占領軍のお偉方にどんな落ち度があろうとも、彼らは意図的に破壊を行おうとしていたわけはありません。問題となっていたのは資料を破棄するかどうかではなく、その資料に関心のあるどの機関がそれを受け入れるかということでした。かのフーバー戦争・革命・平和研究所が、これらの資料を切実に欲していました。いくつかの大学図書館も同様でした。私もメリーランド大学のために名乗りを上げたかったのですが、私 1 人で責任を取ることにはできません。そこでバード学長とハワード・ロベルスタッド図書館長宛てに手紙を書き、この資料群について知らせました。このときバード学長は「残念だがそんなにたくさんの資料を適切に保管するだけの場所も設備もない」と言うこともできたでしょう。実際そういう状況だったはずですが、そして「その資料がどれほど貴重な性質のものであろうとも、それを最大限に活用できるようなプログラムがうちの大学にはない」と言うこともできた

でしょうし、それもまた事実だったはずです。しかし先見の明のあるバード学長には、絶好の機会が 25 マイル先から転がってくるのが見えていました。バラの花のキャンディを作るのに、花瓶やレシピを探すのはあとからでいい。彼は「バラのつぼみは摘めるうちに摘め」という古くからの格言に従ったのです。ですからこの資料がメリーランド大学の手に渡ったのは、まったくバード学長のおかげであり、これには頭が下がります。学長のゴーサインを受け取ると、私は全速力でメリーランド大学を売り込みにかかり、GHQ との立派なコネクションがあったおかげで、資料を手に入れることができました。

ここへきて、問題にぶつかります。これらの資料をどうやって大学まで送るのか？ この当時は、フジヤマ引越会社に連絡して「本と書類 20 トン分をアメリカのカレッジパークに送りたいから、よろしく頼む」と言って済むような話ではないのです。あるいは三越デパートにふらっと入って行って、大きな木箱を 54 ほど欲しい、というわけにもいきません。すべてが軍隊的に、数字をきっちり出して進めなくてはならないのです。まず木材がどれくらい必要なかを算出しなければなりません。それから箱を組み立てる大工や荷造りをする人手を徴用しなければなりません。昼間は本職がありましたから、こちらの仕事は夜と週末と休みの日にやるしかありませんでした。そんなこんなで、資料を整理し、記録をとり、箱に詰め、ふたをし、発送するまで、このプロジェクトには 1949 年の夏から 1951 年の夏までを費やしました。

カレッジパークにようやく到着した資料は、それから長らく特別な書庫にしまっておかざるをえませんでした。マッケルディン図書館の建設が計画段階にあったとき、私はもっと大きな建物になることを期待していました。少なくとも奥行きはもう 60 フィート、間口はもう 40 フィート、高さはもう 20 フィートはあってほしかった。欲張りの性格なものでね。しかし図書館予算はどんどん削られてしまった、これはたいへん残念なことです。図書館は大学の中でずっと待遇がよくないのです。もちろん、大学の運営側は上層部も下っ端も、先立つものがなければこの不幸な状況をどうにもできません。図書館の蔵書を所蔵する建物は私に言わせれば最重要事項であり、我々はみなこれを実現するために持てる力のできるかぎりのことをすべきです。突き詰めれば、図書館は大学の知的生命の核となるハブなのですから。アイビーリーグやビッグ 10、西海岸の名門大学はどれも第一級の図書館を備えています。我々メリーランド大学の図書館も、引けをとるわけにいきません。私はそのための手助けをすることができたことを光栄に思っていますし、これからもそうしていきたいと考えています。

最後に、私が光栄にもメリーランド大学でともに働き、知ることのできた 3 人の偉大な学長に心からの敬意と感謝を表したいと思います。1 人は、メリーランド大学を新しい境地へと導いたハリー・C・バード学長。新境地の開拓というのは誰にでもできることではありません。ですが、心の奥底に、真の気概があるべき場所に肝心なものを持っているバード学長には、それが可能だったのです。次に、ウィルソン・エルキンス学長、偉大なるキリスト教徒の紳士です。これは最大級の褒め言葉です。これほどまでに褒めたたえるのは、私

が彼と長年の親友だからではなく、本当にそうだからです。みなさんの多くがご存じのように、彼が学長に就任したのはとてもたいへんな時期でした。しかし彼はすばらしい成果を上げ、見事な仕事ぶりで 24 年間にわたって大学を前へ、上へと押し進めていきました。考えてもみてください、ほぼ四半世紀です。なんと立派な業績でしょう！ この過ぎ去った年月を顧みるに、彼なくしては何ができただろう、と思うことがよくあります。そして現在のジョン・S・トール学長。彼はこの大学を我々が望むとおりの卓越した地位へと導くのに必要な資質を、すべて持ち合わせています。鋭い頭脳、アイデア、ビジョン、勇気、人間味、仲間とともに馬車馬のように働くことのできる能力、そしてあふれる生命力。私はときに、この人間ダイナモのような彼が、学長室のある新しくできた建物の壁をぶち破ってしまうのではないかと心配になることがあります。先週の日曜にエルキンス学長の長きにわたる大学への立派な貢献を称えて命名されたばかりの建物です。あの美しい建造物が破壊されてしまうのは見たくありませんね。それにももちろん、未来への期待に満ちた新しい学長にそんなたいへんなことが起こってほしくもありません。私はまた、大学総長のロバート・L・グラックスターン博士にも御礼を申し上げたいと思います。彼は多忙を極めるなか時間と労力と関心を割いて、4月23日に本日の件に関して寛容なお手紙を私に下さいました。そんなことをしていただかなくてもよかったのに、急務ではなかったのに、それでも彼は手紙を書いてくれたというので、なおのこと、生涯大切にしたいと思います。さらに、ハラー博士、ジャック・シギンス、フランク・シュルマンら、図書館の東アジアセクションのメンバーに、この日本語資料の整理を進めてくれたことを感謝します。そしてもう一度、このコレクションを私にちなんで命名するという名誉をくださったすべての方々に御礼いたします。また、今日のこの機会を準備してくれたメリーランド大学図書館と東アジア研究委員会にも感謝します。友人である前図書館長のハワード・ロベルスタッドにも謝意を述べないわけにはいかないでしょう。彼にはいろいろと助けてもらったし、東京から長いことかけて資料を出荷する間、また私がメリーランドに戻ってきた1951年以降も、私に辛抱強く付き合ってくれました。私はときになかなか扱いにくいのです。これについては、歴史的資料をひもといてたくさん証拠をあげることができます。加えて、今日ここにいる皆さんの中にも少なくとも数人は、その事実を示すような証言ができる人がいると思います。ロベルスタッド氏は、どんな挑発を受けても常に穏やかでいてくれました。それからまた、日本にいるたくさんの方々の良き友人たちにも、私の太平洋戦争に関する歴史プロジェクトに手を貸してくれたことに感謝します。彼らの助言や忠告、支えがなければ、ああいったものを書きあげることはできなかったでしょう。中には、本コレクションの日本語資料について強力な援助と貴重な示唆をくださった方々もいます。そしてなにより、日本の友人たちのおかげで、知的な地平線が広がり、人生が豊かなものとなり、歴史というものを長期的な視点から見られるようになりました。このすばらしく気高き人たちに誓って、私はここメリーランド大学での日本研究の促進と発展にできるかぎりのことをしていきたいと思います。このような誓いを立てるのは、日本がアメリカの同盟国であ

り極東での重要国であるからではなく、また私がそこを第二の故郷と思っているからでもありません。日本がそもそもさまざまな分野において広く深く研究される価値のある国だからです。たとえば、1945年の敗戦で焦土と化した日本が今日世界第3位の産業国となるまでに復興を遂げたことは、日本国民に多大なる恩恵をもたらしました。これは20世紀の奇跡の1つと言えるでしょう。

ここで皆さんに、秘密をお聞かせしましょう。私は今いくつか計画していることがあり、トール学長、グラックスターン総長、ハラー博士ほか数人と、近々話し合うつもりです。この計画が実現すれば、図書館にとって、大学にとって、日本にとって、また日本人にとって重要な結果をもたらすでしょう。最後に、本日この式典にお集まりいただいたすばらしい聴衆の皆様一人一人に、とりわけこんなに長いこと私の話を辛抱強く、礼儀正しく聴いていてくださったことに、深い感謝を申し上げます。神の御加護を。

翻訳: 井澤美智子 2011年10月